國學院大學学術情報リポジトリ

2019年度国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-05-14
	キーワード (Ja): NDC8:121.52, 国学‖コクガク
	キーワード (En):
	作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001624

欧米における国学研究の過去から未来へ
――研究史と津軽国学の紹介

藤原　義天恩
レスブリッジ大学　准教授

1、はじめに

1998 年の春、私はカナダ・バンクーバーの University of British Columbia（UBC）にて歴史と英文学のダブルメジャーを専攻していた。カナダで育った日系の私は許南麟（Nam-lin Hur）先生の講義で初めて日本史を勉強し、その講義内容に魅了された。授業で提出する研究論文は日本人のアイデンティティについて書きたいと相談したところ、許先生は「それなら、本居宣長（1730 ～ 1801）について調べて書いたらいい」と提案して下さり、英文の研究書として、ピーター・ノスコ氏（Peter Nosco）の *Remembering Paradise* とハリー・ハルトゥーニアン氏（Harry Harutoonian）の *Things Seen and Unseen* を紹介して下さった。この 2 冊を読みながら、私は国学について知ることとなり、本居宣長についての論文を書いた。

それから数年後、許先生の推薦状をもって東北大学大学院文学研究科に入学した私は、日本思想史研究室で佐藤弘夫先生の指導と研究室の先輩たちの支援を受け、本居宣長の神観念をテーマに修士論文を書き上げた。さらに数年が経ち、今度は幕末期における国学の地方的展開について研究することを希望した私は、国際基督教大学の小島康敬先生から津軽（弘前）の平田派国学と平尾魯僊（1808 ～ 1880）を紹介して頂いた。やがて 2007 年、UBC アジア学科の学科長を務めていたピーター・ノスコ先生の指導の下、私は津軽における平田派国学と魯僊を研究対象とした博士論文を書くに至った。その過程で大変有意義だったのは、1 年間日本国際交流基金の博士フェローシップにより弘前大学で長谷川成一先生に指導を受けながら資料調査を行えたことと、この間に代々木にある平田神社主催の平田研究会に参加できたことである。

以上の個人体験から、1990 年代後半にカナダの大学で学部生時代を過ごした研究者が、英語を通じて江戸時代の日本における国学をいかに学び得たかを窺えるであろう。本報告では、そのようなカナダの研究者の視点を通じて国学研究の国際的な広がりについて考えてみたい。そのためにまず 1 点目として、これまで 30 数年の間に英語で出版された国学研究のなかで代表的な著書に注目しながらその研究史について検討する。つぎに 2 点目として、これまで国学は英語で、“National Learning”、“Nativism”、“Exceptionalism” などとさまざまに翻訳されてきたが、その英訳の是非について検討する。3 点目、以上の英語圏の研究史や「国学」の英訳を踏まえて、私が関心を寄せてきた津軽の国学に関する研究成果の大筋を紹介する。4 点目、津軽の国学の中心人物であり、私が研究対象としている

国学者である平尾魯僊の行動と思想について論じる。最後に5点目として、現在の私が取り組んでいる研究を紹介しつつ、今後の研究課題について述べる。

2、欧米の国学研究史について

ここ30数年の間、欧米の日本学研究者によって国学を主題とする著書や論文が次々と出版されてきたので、ここでその代表的な作品を紹介する。まず欧米の日本学研究者による国学研究の最初の著書、1988年に公刊されたハリー・ハルトゥーニアン氏の *Things Seen and Unseen* を取り上げる。国学者の思想をイデオロギーとして捉えた氏は、国学者の生涯や行動以上にその著述に注目し、そこから浮かび上がるディスクールの分析を試みた。The "seen" and "unseen"、すなわち目に見える「顕事（あらはにごと）」と目に見えない「幽事（かくりごと）」を軸に、本居宣長は「人間を神格化し」、これと対照的に平田篤胤（1776～1843）は「神を人格化した」と論じたのである[1]。ハルトゥーニアン氏によると、宣長は和歌を通じて人々の日常に意義づけをし、篤胤は「古道」への言及によって農民の農作業や生活を力づけた。天保年間（1830年代）にそれまで「都市現象」であった国学が都市から農村へ移り、篤胤における "routinizing the Ancient Way"、すなわち「古道の日常化」によって「道」は日々の生活とより密接な関係を持つようになった。これらにより、平田国学は民衆の間で浸透した、とされる[2]。

ハルトゥーニアン氏が著名な国学者のテキストを根拠に国学を幅広く概観したのに対し、アン・ウォルソール氏（Anne Walthall）は、平田篤胤の門人となった農民女性である松尾多勢子（1811～1894）の行動と思想について、その時代背景と関連づけながら論じた[3]。氏は、信濃・伊那谷出身の松尾多勢子に注目しながら、その生涯を再現することによって多勢子とその仲間がいかに国学を実践し、それをいかに「社会的運動」として繰り広げたかについて説いている。従来の研究史が、支配階級の武士、特に男性が明治維新にどのように関わったのかを述べてきたかに対し、ウォルソール氏は、教育を受けて文学や和歌に精通していた農民女性がいかに維新前後の出来事を見てそれに参加したのかという新鮮な視点を提供した。松尾多勢子という女性は、伊那谷において岩崎長世がリードしていた平田門人の集いに参加していたが、その傍らよく旅にも出かけていた。ウォルソール氏が述べるように、「明治維新によって、彼女は農家の婦人から歌人へ、そして影響を及ぼす婦人へとそのアイデンティティを幾度か作り変えることができた」[4]のである。

2000年代に入り、国学を主題とする研究書の出版が続いたが、その代表作の1つはマーク・マクナリー氏（Mark McNally）の *Proving The Way: Conflict and Practice in the*

---

1 Harry D. Harootunian, *Things Seen and Unseen: Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism*. (Chicago: University of Chicago Press, 1988).

2 Ibid. 176.

3 Anne Walthall, *The Weak Body of a Useless Woman: Matsuo Taseko and the Meiji Restoration*. (Chicago: University of Chicago Press, 1998). アン・ウォルソール『たをやめ（手弱女）と明治維新――松尾多勢子の反伝記的生涯』菅原和子訳（ぺりかん社、2005）。

4 Ibid. 260.

History of Japanese Nativism（2005）である。氏は、江戸時代の国学は統一化したものではないと指摘し、かつ国学者やそれぞれの学派の間に“conflict”、すなわち「闘争」ないし「論争」がたびたび起きていたと主張した[5]。江戸に住居していた平田篤胤は、1806 年、賀茂真淵（1697 ～ 1769）からの流れを汲み文学に注力した「江戸派」の国学ではなく、本居春庭（1763 ～ 1828）が学頭であった本居宣長の学派に入門することを意図的に決断している[6]。なお、マクナリー氏は国学における「四大人」の系統についても解説を加えており、幕末維新期から明治初期に至るまでの代表的な平田門人を紹介している。

3、「国学」は英語でいかに表記すべきか？

現代の学会では統一的に「国学」と呼び慣わされる学問は、近世においてはさまざまな名称で呼ばれていた。「古学（いにしえまなび）」、「皇学（みくにまなび）」、「国学（こくがく）」など、その名称は複数あった。欧米において英語での先駆的研究をなしたピーター・ノスコ氏は、1990 年に刊行した著作 *Remembering Paradise: Nativism and Nostalgia in Eighteenth-Century Japan* で、元禄期の町人文化や私塾の形成を背景に国学を体系化した大人たち――契沖（1640 ～ 1701）、荷田春満（1669 ～ 1736）、賀茂真淵（1697 ～ 1769）、本居宣長――の業績を紹介し分析した。ここで氏は、江戸時代の国学に対して“National Learning”と“nativism”の英訳を用いながら、ローマ字化した“*Kokugaku*”も使用し、それを学ぶ者を“nativist”や“*Kokugakusha*”と呼んだ[7]。2018 年に刊行した著作 *Individuality in Early Modern Japan: Thinking for Oneself* でも、ノスコ氏はこれらの用語を基本的に同じように用いている[8]。30 年以上にわたるノスコ氏の研究に注目してみると、「国学」＝“*Kokugaku*”＝“National Learning”＝“nativism”の認識は基本的に変わっていない。ただし、広義の「国学」とは「漢学と呼ばれる中国学に対抗して始められた学問」であり、狭義の「国学」とは「日本独自の古えの「道」を明らかにする目的のもとに、古典を文献学的に研究する学問」を意味すると区別されている[9]。

これと平行して、1988 年から 2010 年代に至るまで英語で発表された研究では、ローマ

---

5 Mark McNally, *Proving The Way: Conflict and Practice in the History of Japanese Nativism*. (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 2005).

6 同上、78 頁。

7 Peter Nosco, *Remembering Paradise: Nativism and Nostalgia in Eighteenth-Century Japan* (Cambridge, MA: Harvard Council on East Asian Studies, 1990) 9.

8 Peter Nosco, *Individuality in Early Modern Japan: Thinking for Oneself*. (New York: Routledge, 2018). Peter Nosco, James E. Ketelaar, and Yasunori Kojima, eds. *Values, Identity, and Equality in Eighteenth- and Nineteenth-Century Japan* (Leiden: Brill, 2015).

9 ピーター・ノスコ著、M.W. スティール・小島康敬監督、星山京子・横山泰子・平山美樹子・谷村玲子翻訳『江戸社会と国学――原郷への回帰』（ぺりかん社、1999）、23 頁。

10 使用の仕方やニュアンスに多少の差はあるが、以下の著書は「国学」を *Kokugaku* ／ Nativism と表記している。Harry D. Harootunian, *Things Seen and Unseen*; Walthall, *The Weak Body of a Useless Woman;* Susan Burns, *Before the Nation: Kokugaku and the Imagining of Community in Early Modern Japan* (Durham, NC: Duke University Press, 2003); McNally, *Proving the Way;* Wilburn Hansen, *When Tengu Talk: Hirata Atsutane's Ethnography of the Other World* (Honolulu:

字の *Kokugaku* と英訳の Nativism が用いられてきた[10]。近世国学が明治時代の教育と学問の形成に大きく関わった過程について論じるミヒャエル・ヴァフトゥカ氏（Michael Wachutka）は、主にローマ字化した *Kokugaku* を用いているが、国学における近世から近代への連続性を指して、ときおり“National Learning”の名称も使用している[11]。

マーク・テーウェン氏（Mark Teeuwen）[12] は、スーザン・バーンズ氏（Susan Burns）とマーク・マクナリー氏の著書を比較して書評を書くにあたって 2006 年までの国学研究史を辿り、そのなかで *Kokugaku* が Nativism として訳される傾向に対して疑問を投げかけた。テーウェン氏が指摘したように、“Nativism”の本来の意味は、“the ambition to revive or perpetuate aspects of indigenous culture in response to a perceived threat from other cultures”、すなわち「他者の文化がもたらすと見られる脅威に対し、自らの文化の様相を復興させ、永続させようとする野望」であり、それは日本の「国学」という多面的で幅広い学問におけるたった 1 つの様相でしかない。それゆえ氏は、「国学」と Nativism とを区別し、その 2 つの関係について研究することを以後の課題とした。多くの国学者は和歌を詠み、歌道論をその学問の中心としていた以上、国学における和歌と歌道論の位置を解明しなければならないと主張したテーウェン氏は、別の論文で伊勢内宮権禰宜を務めた国学者である荒木田久老（1746 ～ 1804）について論じ、久老は和歌をより深く理解し、よりよく詠むために国学を学んだのだと述べている[13]。

2015 年になると、マーク・マクナリー氏も Nativism は国学の適切な英訳ではないと断言しており、これに代わって Exceptionalism という斬新な用語の方がその思想に適すると主張した[14]。氏は、“Nativism”とは、19 世紀のアメリカ合衆国で移民が大勢入国してくることに反対して起きた反移民運動や外国人に対する嫌悪感を意味する米国史研究特有の用語で、これを江戸時代の日本にあてはめて国学の英訳に用いるのは相応しくないとした。日本の場合、Nativism に相当するのは、ペリー来航以降の 1850 年代から 1860 代までの限られた時期に隆盛した尊皇攘夷思想に限られるという。なお、マクナリー氏が提唱する Exceptionalism は、記紀神話の神々によって生み出された万邦無比の皇国日本の特殊性と優越性を主張する思想を指し、具体的には江戸末期の国学と水戸学の両方がもっとも当てはまるとしている。そのためマクナリー氏は、「国学」自体はローマ字の“*Kokugaku*”で表記している。

University of Hawai'i Press, 2008); Peter Flueckiger, *Imagining Harmony: Poetry, Empathy, and Community in Mid-Tokugawa Confucianism and Nativism*（Stanford, CA: Stanford University Press, 2011）.

11 Michael Wachutka, *Kokugaku in Meiji-Period Japan: The Modern Transformation of 'National Learning' and the Formation of Scholarly Societies*（Boston & Leiden: Brill, 2013）.

12 Mark Teeuwen, “Kokugaku vs. Nativism,” *Monumenta Nipponica* 61, no. 2（Summer, 2006）, 227-242.

13 Mark Teeuwen, “Poetry, Sake, and Acrimony: Arakida Hisaoyu and the Kokugaku Movement,” *Monumenta Nipponica* 52, no. 3（Autumn 1997）.

14 Mark Thomas McNally, *Like No Other: Exceptionalism and Nativism in Early Modern Japan*（Honolulu: University of Hawai'i Press, 2015）.

一方、アン・ウォルソール氏は、この著書を書評した際、国学は日本における Exceptionalism の1例とするにはあまりに幅広いとしてこの用語を批判し、国学は“Japan Studies”と訳すのが最も適切であると主張した[15]。既述の通り、近年は研究者の間ではローマ字化した *Kokugaku* が多用される傾向にあったが、適切な英訳が追及されるなか近年になってあらたに Japan Studies という用語が提案されたのである。

これと同じ 2017 年、ジョン・R・ベンテリー氏（John R. Bentley）は、契沖から鈴木雅之（1837 ～ 1871）に至るまで 13 人の国学者の代表的著作を英訳し、その紹介とともに国学の資料集 *An Anthology of Kokugaku Scholars 1690–1868* を刊行した[16]。幅広い学問である国学の多様な“tapestry（タペストリー）”を提示するためにこの資料集を編集したと述べたベンテリー氏は、“National Learning”と“Nativism”の用語はいずれも不適切とし、一貫してローマ字の“*Kokugaku*”を用いている。

4、津軽の平田派国学に関する先行論

以上、欧米の研究者による国学研究について簡単に紹介してきたが、ここからは私が関心を寄せてきた津軽の平田派国学に関する先行研究について紹介する。安政 4（1857）年から弘前城下では、平田篤胤没後の門人が次々とその私塾・気吹舎に入門し、明治初期には津軽の平田門人が 18 人まで増えた。現在、弘前藩の平田派国学について研究を進めることができるのは、2000 年代に多くの研究者がこれに関連する資料を掘り起こして翻刻し、『青森県史　資料編　近世　学芸関係』（2004 年）に掲載し紹介したからである[17]。また、この大きな事業と同時期に、平田神社や国立歴史民俗博物館が所蔵する平田家と平田派国学に関する新しい資料が大量に公開され、研究の進展に貢献した。

なおこれに先立ち、津軽の平田派国学者の代表的人物である平尾魯僊についての先駆的な研究が行われていた。中川和明氏は、幕末の平田国学の盛衰を背景に、弘前における国学の展開について検討している[18]。小島康敬氏は、民俗学と国学の両方を行った知識人として魯僊を捉え、近世国学が近代民俗学へと展開していったことを示す実例であり、日本思想史上注目すべき価値のある思想家であると高く評価した[19]。さらに遡ると、魯僊に関する資料を紹介し、その伝記と思想紹介をまとめた森山泰太郎氏の業績もある[20]。

津軽の平田派国学に関する研究がますます進展することによって、いくつかの重要かつ

15　Anne Walthall, Review of *Like No Other: Exceptionalism and Nativism in Early Modern Japan*, by Mark Thomas McNally. *The Journal of Japanese Studies* 43, no. 2（Summer 2017）: 434-439.

16　John R. Bentley, *An Anthology of Kokugaku Scholars 1690–1868*, trans.（Ithaca, NY: Cornell University East Asia Program, 2017）.

17　青森県史編さん近世部会『青森県史　資料編　近世　学芸関係』（青森、青森県史友の会、2004）。

18　中川和明「幕末平田塾と地方国学の展開――弘前国学を例に――」『平田国学の史的研究』（名著刊行会、2012）。

19　小島康敬「幕末期津軽の民俗学者・平尾魯僊――平田篤胤と柳田国男の間」『市史ひろさき　年報』（10 号、2001）。

20　森山泰太郎「平尾魯僊」『郷土の先人を語る（七）兼松石居・平尾魯僊・秋田雨雀』（弘前市立図書館、2001）。

新しい研究視点が開かれることになるように思われる。1つ目は、既述した2000年代になって公開された新資料の検証に基づいて明らかになってくる平田派国学の地方的展開についてである。2つ目には、地理的な面で本州北端に位置する辺境から見た幕末・明治維新期における国学の役割についてである。3つ目として、津軽の平田門人社中は商人を中心としたグループであったため、その身分的な視点からの新たなナラティブである。私はこれら先行研究や資料翻刻の土台の上に、平尾魯僊と平田派国学についての研究を進めることができたのである。

5、平尾魯僊の行動と思想――風説留に着目して

平尾魯僊は、弘前城下町で生れ育ち活躍した画人であり、民間伝承の蒐集や歴史の叙述に努めた知識人であった。魯僊は幼少期より絵描きの才能を発揮し、著名な絵師に学んだ。学問にも秀でた彼は、商人の身分でありながら弘前藩校稽古館の師匠に学んだ。魯僊は成人してから数年間は家業の魚屋の仕事をしたが、30歳からは家業を弟にゆずって絵師として独立し、画業で生計を立てるようになった。

魯僊は、若い時から漢学を学んだのはもちろん、10代後半より国学にも関心を抱くようになり、40歳前後に国学研究に対する確信を得たものと考えられる。安政4（1857）年、鶴舎有節が気吹舎に入門し、弘前からは最初の平田篤胤没後門人となった[21]。魯僊はその数年後の元治元（1864）年に学友・有節の紹介によって入門した。彼の代表的な絵には「安門瀑布図」や「祢婦太之図（ねふたのず）」があり、著書には安政2（1855）年の蝦夷地探訪に基づく『箱館紀行』と『洋夷茗話』、民間伝承や奇談怪談を紹介し論じた『合浦奇談』『谷の響』『幽府新論』がある。

鶴舎有節や平尾魯僊を中心とした津軽の平田門人社中は、平田派国学のなかでも幽冥界に強い興味を示し、そこに存在する鬼神や神霊に関わる幽冥思想や鬼神論に言及した。本州北端に位置する津軽の地において、津軽の人々は政治や学問の中心である江戸や京都に憧れを示しながらも、そこからの距離を感じつつ生きていた。しかし、そこで活躍した平田門人たちはこの平田派国学の思想によって、辺鄙な場所にある津軽も、皇国日本のなかに位置づけようと試みていた[22]。

津軽の平田門人社中で最初に平田塾に入門した鶴舎有節はグループのリーダー役を務め、学友の平尾魯僊とともに、幽世や幽冥界とその霊や鬼神などがいかに目に見える人間の「顕世」世界に関係し、関与したかについて興味を示し、篤胤が『鬼神新論』や『霊能真柱』などで説いた幽冥論を読み、それぞれの学説に取り入れた。まず魯僊は、慶応元（1865）年に完成した主著『幽府新論』で、弘前城下町や周囲の弘前藩領内で起きた不可思議な出来事などを篤胤の幽冥論を引きながら説明している。たとえば、亡くなった人の姿が街で他人に見られたのは、死者の「魂」が活動していることとされる。雷や稲妻といった自然現象も神々の為す業と考えられた。

21　小島「幕末期津軽の民俗学者・平尾魯僊」19頁。

22　Gideon Fujiwara, *Spirits and Identity in Nineteenth-Century Northeastern Japan: Hirata Kokugaku and the Tsugaru Disciples*. PhD Dissertation. University of British Columbia, April 2013.

有節も、篤胤の幽冥論に依拠しながら、神霊がいかに人々の生活や地元弘前領土を支配しているのかについて論じている。有節が詠んだ和歌の多くは、日本の神々が弘前藩最高峰の岩木山や周囲の領土を保護し続けていたことに対する敬神の念を表現する。慶応 3（1867）年に完成した主著『顕幽楽論』では、人々がこの世においてのみならず死後の世界においても神々を敬い拝するように促している。有節は、人々に人生を前向きに生きるよう励まし、生前も死後も「楽」を抱いて活動するように主張している。私が以上のことを論じた著書は、Cornell University Press, Cornell East Asia Series によって刊行される予定である[23]。詳細はそのなかで御覧頂きたい。

以上概観したように、平尾魯僊は平田派国学者としていくつもの重要な著書を記しており、既述の通り、その活動と業績は多岐にわたるものであった。その前提条件として、魯僊は商人身分の知識人でありながら、政治情報を迅速かつ大量に収集していたことが重要である[24]。被治者の立場にあり、しかも辺境の弘前の地にあって、儒学や国学を学ぶ同志や和歌を詠む仲間との関係を通じて、各地の藩主の権力に近い武士よりも、最新かつ多量の政治情報にアクセスできたのである。公文書や書簡、随筆、文学、図などの資料を写して編纂した文献を「風説留」と呼ぶが、18 世紀後半より 19 世紀に至るまでに日本各地で知識人の手によって編集された風説留は、近年の研究で 300 数十以上確認されている[25]。

19 世紀に至るまで、近世の日本にはさまざまなメディアが流布していた。瓦版、読売、錦絵、鯰絵、随筆、刷り物など、江戸時代の政治や社会に関する情報は多様な文章や絵によって伝播したことはよく知られる。だが、徳川幕府の権力のもと、幕府やその政策に対して直接に言及し批判することには厳しい検閲が行われたため、これらのメディアは政治や社会の実情に触れることができなかったというのが通説である。

他方、風説留は幕府や大名の公文書などを検閲なしで写し集めていた。風説留に着目すると、武士に限らない、より幅広い階級の人々が日本列島の各地で精密な政治情報を入手し、交換していたことが判明する。本州北端の弘前においても、商人身分の知識人がこれほど高度で大量の政治情報にアクセスしていたことは、日本の情報ネットワークが各地に幅広く浸透していたことを実証する。風説留に関する先駆的研究を行った宮地正人氏によると、風説留は幕末期の日本に「公論世界」が形成されつつあったことを示し、明治初期に日本各地で新聞の経営が成立する「社会的前提を象徴するもの」である[26]。

平尾魯僊が編纂した風説留は、ペリー来航と日本の「開国」に関する資料を安政 2（1855）年にまとめた『太平新話』と、明治維新や明治初期の出来事について記録した

---

23 Gideon Fujiwara, *From Country to Nation: Ethnographic Studies,* Kokugaku, *and Spirits in Nineteenth-Century Japan* (Ithaca, NY: Cornell East Asia Series, an imprint of University Press, 2021).

24 Gideon Fujiwara. "Channeling the Undercurrents: *Fūsetsudome*, Information Access, and National Political Awareness in Nineteenth-Century Japan," *The Journal of Japanese Studies*, 43, no. 2 (Summer 2017).

25 「別表」東京大学史料編纂所風俗画像史料解析センター編『風説留中画像史料一覧（稿）』（東京大学史料編纂所、1999）

26 宮地正人「ペリー来航はどう受けとめられたか――風説留世界の成立」同『幕末維新変革史上』（岩波書店、2013）110 ～ 111 頁。

資料を明治初年にまとめた『明治日記』の２つである[27]。『太平新話』では、アメリカのペリー艦隊やロシアのプチャーチン艦隊の来航と翌年に実現した開国、日本の防衛能力（とその不足）に対する魯僊の認識を確認できる。『明治日記』には、明治維新の展開、戊辰戦争で新政府軍が徳川幕府軍に勝利したことが記録され、その２つに対する弘前藩の貢献が記されている。大政奉還と王政復古によって天皇が政治の中心となったことを魯僊が讃えていたのは、『明治日記』に集められた資料の内容とその配列を分析することによってわかる。

このように、魯僊は弘前を代表する知識人として、最新の政治・社会情報を風説留にまとめることで「日本国」の実情を理解しようとしたが、一方では平田派国学を学ぶことによって「津軽の国」（弘前藩）を皇国日本のなかに位置付けることを目指していた。平田学派の人脈ネットワークも、もう１つの大きな情報源であった。江戸の気吹舎を中心とする平田学派は日本各地に門人がいて、江戸と各地との間で書簡を交換していた。特に平田篤胤の養子となった平田銕胤は、養父の後継者として気吹舎を経営するようになったが、門人とのやり取りでは平田塾や国学の学問内容に限らず、政治・社会情報を詳細に書き送り、門人からは各地方の情報を聞き入れていた。津軽の平田門人社中の代表である鶴舎有節も、平田銕胤との文通で 15 年間もの長きにわたって情報を交換していた。

6、現在の研究と今後の課題

最後に、私が最近取り組んでいる研究について述べたい。１つは、2020 年１月にミネルヴァ書房から刊行された北原かな子・浪川健治編『近代移行期における地域形成と音楽――創られる伝統と異文化接触』（ミネルヴァ書房、2020）に掲載された論文「平尾魯僊の聴いた音と音楽――北奥地域のグローバル化と社会変容」である。本論は平尾魯僊の見聞記録を分析しながら、北奥の近世から近代移行期における音と音楽に関する連続性と変遷について確認したものである。弘前城下で行われていたねぶ（ぷ）た祭りやお盆の祭りの際に鳴った音や音楽には、近世から幕末にかけて一定の連続性が見られた。これと対照的に、魯僊は安政２年に開港したばかりの箱館を訪ねた際に、そこで初めて西洋の音や音楽、楽器に出会った。西洋の音楽文化を理解し説明する手がかりとして、魯僊は日本の雅楽とそこで用いる楽器との比較を行ったが、このような比較によって、西洋と日本との音楽文化の間にある普遍性を見出したのである。その一方、明治維新を決定づけた戊辰戦争で、官軍側で天皇のために戦死した弘前藩士の霊魂を祭る弘前招魂祭の儀式や当時の軍隊において、魯僊は音と音楽における和洋折衷の現実を見て、これに対する抵抗を示した。これらの分析から、魯僊が民俗学的な観察を行った知識人として異文化に対する一定の客観性を見せた側面が明らかにされるが、明治維新の結果を実現した王政復古を祝い、国学者として皇国日本を尊び日本の文化を清く保つよう願ったため、明治国家と地元弘前が西洋文化を受容しつつあることに対して警戒心を示した側面も窺える。

もう１つは、毎年正月に皇室が主催する御歌会始についてである。皇族や公家を中心に

27　平尾魯僊の『太平新話』と『明治日記』はいずれも弘前市立図書館所蔵。

何百年間も実施され、受け継がれた御歌会始が、平民を含む一般の日本国民が詠んだ歌を受けつけるようになったのは明治 7（1874）年以降である。明治初期に御歌会始にこのような変化をもたらした発端は、弘前城下の旧藩士、下澤保躬が明治 6 年 12 月、国学者・福羽美静を通じて宮内省に建白書を献上したことであった[27]。宮本誉士氏は、明治時代の御歌所と国学者について論じるなかで、御歌会始の発展とこれに関わった国学者の役割について詳しく解明してきた。弘前の国学者でもあり、歌人でもあった下澤保躬がどのような背景からこのような建白書を献上するに至ったのか、幕末から明治初期にかけての弘前における国学者の活動の実態とあわせて明らかにしていきたい。

7、おわりに

以上本報告では、カナダの研究者の視点から、国学研究の国際的な広がりの現状と今後について検討してきた。まず、欧米で行われてきた代表的な研究書を紹介することから、欧米研究における「国学」の英訳の変容について概観し、これらを踏まえて、私が取り組んできた研究について紹介した。私はまもなく津軽の平田派国学に関する著書を英語で刊行する予定であるが、その大筋も簡単に紹介させて頂いた。津軽の平田門人社中の中心人物の 1 人である平尾魯僊については、19 世紀の後半において迅速に、かつ大量の政治情報にアクセスし、これらを収集して 2 つの風説留を編集したことの意義について論じた。さらに、今年 2020 年 1 月に刊行された論文を引きながら、近世から近代移行期における音と音楽の連続性と変遷について、魯僊の見聞記録から検討した内容を報告した。最後に、私の現在の研究計画を 1 つ示した。魯僊とは国学と歌詠みの仲間だった下澤保躬が、どのような歴史的・社会的文脈から宮中の御歌会始に平民による歌の詠進を受けつけるよう建白するに至ったのか。この問題を明らかにするべく、今後も調査と考察を続けたい。

【参考資料】

青森県史編さん近世部会『青森県史　資料編　近世　学芸関係』（青森、青森県史友の会、2004）

アン・ウォルソール Walthall, Anne. Review of *Like No Other: Exceptionalism and Nativism in Early Modern Japan*, by Mark Thomas McNally. *The Journal of Japanese Studies* 43, no. 2 (2017): 434–439.

――.『たをやめ（手弱女）と明治維新――松尾多勢子の反伝記的生涯』菅原和子訳（ぺりかん社、2005）。

――. *The Weak Body of a Useless Woman: Matsuo Taseko and the Meiji Restoration*. Chicago: University of Chicago Press, 1998.

小島康敬「幕末期津軽の民俗学者・平尾魯僊――平田篤胤と柳田国男の間」『市史ひろさき　年報』（10 号、2001）

Teeuwen, Mark. "Kokugaku vs. Nativism," *Monumenta Nipponica*, Vol. 61, No. 2 (Summer, 2006).

――. "Poetry, Sake, and Acrimony: Arakida Hisaoyu and the Kokugaku Movement," *Monumenta Nipponica*, Vol. 52, No. 3 (Autumn 1997).

東京大学史料編纂所風俗画像史料解析センター編『風説留中画像史料一覧（稿）』（東京大学史料編纂所、1999）

---

[27] 宮本誉士「御歌会始の詠進制度と明治の国学者」『御歌所と国学者』（弘文堂、2010）、187 ～ 219 頁。

中川和明「幕末平田塾と地方国学の展開――弘前国学を例に――」『平田国学の史的研究』（名著刊行会、2012）

ピーター・ノスコ Nosco, Peter. *Individuality in Early Modern Japan: Thinking for Oneself*. New York: Routledge, 2018.

――.『江戸社会と国学――原郷への回帰』M.W. スティール・小島康敬監訳、星山京子・横山泰子・平山美樹子・谷村玲子翻訳（ぺりかん社、1999）

――. *Remembering Paradise: Nativism and Nostalgia in Eighteenth-Century Japan*. Cambridge, MA: Harvard Council on East Asian Studies, 1990.

Nosco, Peter, James E. Ketelaar, and Yasunori Kojima, eds. *Values, Identity, and Equality in Eighteenth-and Nineteenth-Century Japan*. Leiden: Brill, 2015.

Burns, Susan. *Before the Nation: Kokugaku and the Imagining of Community in Early Modern Japan* (Durham, NC: Duke University Press, 2003).

Hansen, Wilburn. *When Tengu Talk: Hirata Atsutane's Ethnography of the Other World*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008.

藤原義天恩 Fujiwara, Gideon. *From Country to Nation: Ethnographic Studies*, Kokugaku, *and Spirits in Nineteenth-Century Japan*. Ithaca, NY: Cornell East Asia Series, an imprint of Cornell University Press, 2021.

――.「平尾魯僊の聴いた音と音楽――北奥地域のグローバル化と社会変容」北原かな子・浪川健治編『近代移行期における地域形成と音楽――創られる伝統と異文化接触』（ミネルヴァ書房、2020）

――. "Channeling the Undercurrents: *Fūsetsudome*, Information Access, and National Political Awareness in Nineteenth-Century Japan," *The Journal of Japanese Studies*, summer 2017 issue (Vol. 43, No. 2).

――. "Rebirth of a Hirata School Nativist: Tsuruya Ariyo and His Kaganabe Journal," *Values, Identity and Equality in Eighteenth and Nineteenth-Century Japan*. Eds. Peter Nosco, James Ketelaar, and Yasunori Kojima. Leiden: Brill, 2015. 134-158.

――.「平田門人と主体性の問題について――鶴舎有節と『かがなべ』日記を題材にして――」長谷川成一編『北奥地域史の新地平』（岩田書院、2014）

――.「戊辰戦争と弘前招魂祭に関する一考察――弘前の平田門人を中心に」浪川健治・小島康敬編『近世日本の言説と「知」――地域社会の変容をめぐる思想と意識』（清文堂出版、2013）

――. *Spirits and Identity in Nineteenth-Century Northeastern Japan: Hirata Kokugaku and the Tsugaru Disciples*（「十九世紀の日本における神霊とアイデンティティ――平田国学と津軽の門人」博士論文 University of British Columbia、2013）

――.「平尾魯僊『平尾魯仙歌集』について――付〈翻刻〉弘前市立図書館蔵『平尾魯仙歌集』」『弘前大学国語国文学』（32 号、2011）

――.「『松前風景』（北海道大学付属図書館　北方関係資料室蔵）」『弘前大学國史研究』（130 号、2011）

Flueckiger, Peter. *Imagining Harmony: Poetry, Empathy, and Community in Mid-Tokugawa Confucianism and Nativism* (Stanford, CA: Stanford University Press, 2011).

Bentley, John R., trans. *An Anthology of Kokugaku Scholars 1690-1868*. Ithaca, NY: Cornell University East Asia Program, 2017.

McNally, Mark Thomas. *Like No Other: Exceptionalism and Nativism in Early Modern Japan*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2015.

――. *Proving The Way: Conflict and Practice in the History of Japanese Nativism*. Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 2005.

宮地正人「ペリー来航はどう受けとめられたか――風説留世界の成立」宮地正人『幕末維新変革史　上』（岩波書店、2013）
――.「風説留から見た幕末社会の特質――『公論』世界の端緒的成立」同『幕末維新期の社会的政治史研究』（岩波書店、1999）
宮本誉士「御歌会始の詠進制度と明治の国学者」『御歌所と国学者』（弘文堂、2010）
森山泰太郎「平尾魯僊」『郷土の先人を語る（七）兼松石居・平尾魯僊・秋田雨雀』（弘前市立図書館、2001）
Wachutka, Michael. *Kokugaku in Meiji-Period Japan: The Modern Transformation of 'National Learning' and the Formation of Scholarly Societies*. Boston & Leiden: Brill, 2013.